

【書評】

## 坂本いづみ, 茨木尚子, 竹端寛, 二木泉, 市川ヴィヴェカ 著 『脱「いい子」のソーシャルワーカー反抑圧的な実践と理論』

(現代書館, 2022年, A5判, 192頁, 2,200円+税)

児島 亜紀子  
(大阪公立大学)

本書は、英国やカナダのソーシャルワーク実践・ソーシャルワーク教育において現在主流となっている「反抑圧的ソーシャルワーク (AOP)」の理論から実践の足場づくりまでを、日本で初めて紹介した書籍である。日本の福祉現場では、低賃金や不安定就労の常態化、劣悪な労働環境などがこれまでも指摘され続けてきた。いくなれば、現場で働く「善意」の「いい子」たる福祉労働従事者たちに我慢を強いることによって、福祉現場は抑圧構造を温存させてきたのである。本書の5人の著者たちは、現場における「いい子」とは、いわゆる「世間や体制、社会システムにとって都合のいい子」のことであると喝破し、福祉現場に横たわる抑圧的な構造を打開するためには、福祉労働従事者たちがシステムにとって「都合のいい子」であることを止めることが重要であると主張する。

本書は3部構成で、9つの章からなっている。第I部ではAOPの理論とその全体像、源流がひも解かれる。この箇所を示されたAOPの理論と特質は、第II部・第III部のそれぞれの著者の体験を踏まえて具体的に展開されることになる。以下に各章の内容を紹介していく。

第1章「反抑圧的ソーシャルワーク (AOP) とは何か——概論と方向性」では、AOPの全体像と課題が、事例を交えて紹介される。AOPの目標とは、社会における力の不均衡を認識し、権力構造や抑圧を是正するための変革を推進させる

よう取り組むことである。本書は、AOPの価値、理念、方向性を次の5点に整理している。①ひとつの抑圧の形態にのみ焦点を当てるのではなく、抑圧の連鎖や交差性に目を配り、問題の分析に役立てること、②ソーシャルワーカー自身が自分の立ち位置を多方向から捉えること、③問題を経験している当事者たちをエキスパートとして捉え、ソーシャルワーカーは「アライ (ally)」として、当事者と協働するなかで問題の解決法を見出していくこと、④ソーシャルワーカーの介入は、最小限にとどめること、⑤新自由主義や管理主義など、構造的な問題がどのように個人や家族、コミュニティなどに影響を与えているか、批判的に分析することである。以上の5点を踏まえ、第1章では続けて「新しい」AOPの方向性が示される。以下に挙げる5点がそうであるが、これらが本書全体を貫く柱にもなっている。①「いい子」のソーシャルワーカーからの脱却をはかること、②「知らない」と認める謙遜の心を持つこと、③抑圧・差別の歴史を当事者運動から学び、当事者のアライ＝味方になること、④多面的な自分をソーシャルワーク過程に持ち込むこと、⑤「当たり前」とされていることに疑問を持ち、新しい言説を作ることである。

第2章「カナダでのソーシャルワーク教育の状況と課題」では、カナダの大学教員である本章の筆者が、自身のソーシャルワーク教育の経験を語り、読み手に伝えたいAOPの原理を7つ挙げ

る。①自分の立ち位置を省察し、抑圧構造について考え、自分の特権と抑圧状態について思いを巡らすこと、②内省的省察(critical consciousness)を後押しする「自己変革へと続く成長のための立ち止まり(transformative disruption)」の経験を重要視すること、③カナダでの先住民への侵略行為や、日本におけるアイヌ民族や琉球民族への差別など、抑圧と抵抗の歴史を学ぶこと、④アートをソーシャルワーク実践に生かすこと、⑤同じ価値観を共有する同僚や友人と思いを分かち合い、議論するなど、学びあえる仲間を育むこと、⑥バーンアウトしないように自分の限界を知り、セルフケアをすること、⑦批判的に権力構造の分析をし、構造的変化につながる活動に関わっていくことである。さらにこれらを念頭に、抑圧が蔓延する社会を変えていくための5つの可能性が提示される。すなわち①当事者として声をあげること、②アライとして当事者と協働すること、③メディアや専門団体に働きかけること、④闘うにあたっての戦略を立てること、⑤「焦らず、腐らず」声をあげ続けることである。

第Ⅱ部「AOPの可能性」では、2人の筆者が自身の抑圧の経験とそこから解放、AOPとの出会いについて語る。第3章「『私』から始めるAOP-ケアを中心にした社会をつくるために」は、日本の介護現場で働くなかで違和感や焦燥感を覚えた筆者が、のちにカナダに渡ってソーシャルワークを学び、日本での生きづらさをAOPの視点から再考したものである。本章の筆者は、自分自身の感情を受け止め、それをヒントに社会構造との関係を考え、抑圧に抵抗することが自分にとっては必要であったと述べる。抑圧に抵抗するという考え方は、自分を大切にのみならず、多くの人が生きやすい社会を創造することにつながる。そして「誰もが生きやすい社会」とは、競争や生産性至上主義の価値観を乗り越えた先にあるもので、誰もが肩身の狭い思いをすることなくケアに携わることのできる、いうなればケアを中心にした社会であると結んでいる。

第4章「ささやき声の共鳴から生まれる私たちのAOP-『しょうがない』の向こう側」では、

市役所で非正規雇用の嘱託職員として働いていた筆者が、いわゆる官製ワーキングプアであった自分の経験を振り返る。筆者は、人が社会や組織の一員として公正で尊厳ある扱いを受けられない仕組みがあることを、市役所での日常において知らされることとなる。こうした自らの経験を通して、筆者は「支援者自身が自らを脅かす抑圧を『しょうがない』と受け入れたとき、支援を必要とする人に対し抑圧的なまなざしが向いてしまう」と述べる。そののち、カナダに行って大学でAOPを学ぶようになった筆者は、AOPが無自覚な抑圧構造の枠から個人の意識を解放させることを重要視しているのを知り、感銘を受ける。日本には、ルールに大人しく従う職員を良しとする文化が根強く残っているが、まずは小さな問題意識をともにする横のつながりを見つけ、発信し、語り合い、表明していくこと自体が大きな癒しの効果をもたらし、それはまたエンパワメント効果の高いAOPのアプローチでもあると述べられている。

第Ⅲ部「AOPと日本の現状」では、2人の筆者が日本の福祉現場や社会福祉教育と、AOPが交錯する地点を探る。第5章「日本のソーシャルワーク教育とAOP-社会福祉教育に今こそAOPが必要な理由」では、長年ソーシャルワーク教育に携わってきた筆者が、日本におけるソーシャルワーカーの位置づけと国家資格化の経緯を解説し、そののちに日本のソーシャルワーク教育の現状と課題を考察する。筆者によれば、ソーシャルワーカーが既存の制度を批判する視点を失い、制度の枠内で対象となる人を支援していくだけでは、ソーシャルワークの本来の働きとはいえない。制度自体が矮小化していくなかでは、なおさら制度への批判的な視点とそれを変えていく働きかけが不可欠である。加えて社会の抑圧構造に焦点づけて抑圧に対抗する実践を学ぶAOPが、日本の社会福祉教育の基盤に据えられることの重要性が強調されている。

第6章「精神障害と抑圧・反抑圧」では、精神医療・精神保健福祉の領域に焦点づけ、治療者をはじめとする社会のマジョリティが持っている

る、「あの人は狂っている／狂っていない」という2項対立的な図式を、治療者は手放す必要があるとする。筆者は、精神医療分野で昨今注目されている「オープンダイアログ」を紹介している。この実践において行われる「相手の話を最後までじっくり聴くこと」とは、自分自身の思い込みや決めつけを排し、そもそも自分は相手のことを理解できないという前提に立つこと、すなわち「他者の他者性」に耳を傾けることであると述べられている。これは、治療者が機械的・一方的に判断するのではなく、クライシスに陥った当事者の声に基づき、当事者の内在的論理を理解しようと努め、治療者には何ができるか協働して考えることである。筆者はこれを with-ness に基づく支援と呼び、かかる試みが AOP の実践であることを強調している。

第7章「障害当事者運動にみる AOP—その可能性と課題」では、まずもって筆者と障害当事者運動との出会いが語られる。日本の障害当事者運動には、抑圧を構造的に変えようとする継続的な営みがあり、AOP の先駆的な例として当事者運動からソーシャルワークが学ぶことは大きいという。青い芝の会の例にみられるように、日本の家族扶助至上主義を否定し、社会の側に支援を求め、そこから個人の自立を目指そうとする障害者運動の思想は、既存の社会への挑戦でもある。ソーシャルワークにおいて近年「寄り添う支援」が重要であるといわれるが、中立の立場に自らを置いたままでそれがはたして可能なのかと、筆者は疑問を呈する。誰もがこの社会構造のもとで抑圧を受ける存在になりうることに自覚的になり、障害のない者を前提に作られた社会構造の捉え直しをすることで、社会の変革を促す活動に参画していくことが可能になるのではないかと、筆者は問題提起している。

第8章「支援者エンパワメントと AOP」においては、この章の筆者が過去に行った精神科ソーシャルワーカーへのインタビュー調査が紹介され、筆者とソーシャルワークとの浅からぬ縁が語られる。筆者によれば、博論で行った調査と社会福祉施設への調査の2つによって、支援者や支

援現場の構造的課題が浮き彫りになった。筆者自身が関わった介護支援専門員研修においても、「処遇困難事例」とラベリングされるケースには大きな構造的問題が横たわっていた。かかる構造的問題を解決するためには、支援者の認識を変えることが不可欠である。処遇困難事例を「関係性のなかでの心配ごと」とあると措き、他者と「開かれた対話」を行い、他者の視点（他者性）を尊重することによって、支援者にはさまざまな気づきをもたらされる。筆者はこれを with-ness アプローチと呼び、このアプローチに依ることなしに抑圧の問題に携わることはできないと述べる。

終章「明日から始める反抑圧的ソーシャルワークのタネ」は、本書の5人の筆者らによる座談会の記録である。それぞれの筆者の AOP との出会いや、AOP が日本の社会福祉実践にもたらす希望や可能性などが改めて語られたのち、脱「いい子」への第1歩を歩みだして欲しいと、現場の支援者へ向けてのメッセージが送られる。

以下に本書の特徴を述べる。まず1点目は、AOP を実践するにあたって、支援の現場から支援者たち自らが声をあげることを最重要視している点である。AOP の最終目標は、社会における権力の不均衡な布置状況に着眼し、その構造を是正することであるが、同時に抑圧されている人びとと協働しつつ、実践現場での支援を改善していくことも目指される。本書では、支援者がかかる目標に踏み出すにあたり、まずもって現場において従順な「いい子」であることを止め、おかしいことはおかしいと表明していくことの重要性を強調し、それを「新しい」AOP のありかたとして提案している点が特徴的である。

2点目に—これは1点目とも連動するのだが—5人の筆者がそれぞれ抑圧に関連する自分の経験を語ることで、自らの立ち位置を省察し、自分の特権と抑圧状態について思いを巡らすという、いわゆる「批判的省察」を行っている点である。後述するように批判的省察は AOP の本質的な要素の一つであり、本書における筆者らの語りはそれ自体が AOP の実践となっている。

3点目は、終章において5人の筆者がそれぞれ

AOP や日本の社会福祉現場について思うところをざっくりばらんに語り、AOP の可能性を読み手にわかりやすく提示している点である。まさに、この平易でありつつ誠実な語り口こそが本書の大きな魅力であり、AOP を全く知らない者にも、AOP の理論と実践をわかりやすく伝えることに大きく貢献している。抑圧の経験と AOP との出会いをめぐるそれぞれの物語は、学術論文のような堅苦しさがなく、ともすれば文芸作品のような趣さえある。本書の読み手にとっては—それが支援者であればなおのこと—筆者たちの語る内容を自分に引きつけて考えやすく、筆者の経験と自分のそれとの共通点も見出しやすかったのではないだろうか。5人の筆者たちへの共鳴という読み手の経験は、本書に記されているように「無自覚の抑圧構造の枠から個人の意識を解放させる」ことにつながりうるだろうし、そこから抑圧構造や権力の不均衡な分布への気づきももたらされたのではないかと推察する。

一方で、もう少し詳しく述べて欲しかったと思う箇所もなかったわけではない。

たとえば、本書で強調される当事者の「アライ(ally)になる」ということについて。批判的省察から出発し、しかるのちに当事者の味方／伴走者として協働しながら既存の支援を改革していくプロセスについて、具体例を交えた記述があればより AOP のイメージがわくのではないかと思った。その一端は第Ⅲ部でも述べられているのであるが、たとえば「他者の他者性」への気づきがどのように既存の支援の改善に接続するのか、そのあたりのことももう少し詳しく教えてもらえれば有り難かった。

同様のことは批判的省察についてもいえる。批

判的省察は確かに AOP の本質的な構成要素であるが、本書で主張されるような、支援者が「いい子」を止めて積極的に声をあげることは、いかなれば AOP 実践の入り口であろう。批判的省察によってもたらされたさまざまな気づきに基づき、どのようにしたら当事者とのパートナーシップを創り出すことが可能になるのか、あるいはどのようにすれば実践の全プロセスを政治化できるのか、もう少し踏み込んだ記述があってもよかったように思う。

また、福祉現場の支援者たちのなかには、日常の業務に違和感を覚えつつも、職場のルールに従順な「いい子」であることを止められない者や、声をあげられないほど無力化されている者も少なくないであろう。そうした支援者たちに、支援者自らが変えることの重要性をうたう新しい AOP はどのように受け止められるだろうか。理想を語るだけの空虚なアプローチであるという印象を持たれないために、AOP は依然として「いい子」であることから降りられない者たちに対し、どういった方法で接近すべきであろうか。この点についての筆者らの見解を知りたいと思った。

以上いくつかの感想を述べたが、本書が日本における AOP の可能性を示した本として価値あるものであることは間違いない。AOP の理論から実践までを、筆者たちの親しみやすい語り口で縦横に語った本書は、日々の業務に「もやもや」を感じつつも言葉にできないでいる支援者はもちろんのこと、ソーシャルワーカーを目指す学生、新しいソーシャルワーク理論や実践に関心のある院生など、多くの人びとに読まれるべき一冊であるといえよう。